

## 啓蒙家としてのエンツェンスベルガー

青木 順三

### はじめに

以下の小論は、ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーの文学世界全体を論ずることを目差すものではなく、専ら彼のエッセイを対象とし、その優れた特質と、そこに提出されている問題意識の新しさを指摘しようとするものである。従って、近年彼が発表した幾つかのドキュメンタルな作品や、殊に彼の詩については、本論のテーマに直接の関連がない限り論及しない。その理由は、専ら散文の世界に傾斜した筆者の資質をもってしては、彼の詩を十分に理解し味読することが極めて困難であることにもよるが、しかし、そればかりではなく、彼のエッセイが持つ独特な魅力は、他の現代作家にもほとんど類例を見ないものであり、そのみでも優に一つの独自の世界をつくりあげていると信ずるからである。

クリスティアン・リンダーは、作家の一つのタイプとして、「書きたかったことを書かなかった作家」というタイプがある、と述べ、エンツェンスベルガーを、現代におけるその典型の一人であるとしている。すなわち、リンダーによれば、エンツェンスベルガーは、もし彼にその意志があれば、毎年一冊ずつの詩集を書くこともできたであろうが、それをせずに、彼がまず学んでからでなければできなかったことに力を尽くした、つまり、エッセイを、政治的分析の文章を書いたのであり、こうして彼は、彼本来の視角に加えて、中心的な視角をもその作品の中にとり入れることができたのだ、<sup>(1)</sup>というのである。

確かに、この指摘は、ある一面の真実を示すものがあり、おもしろい見方である。政治的エッセイを書くことが、リンダーが言うようにエンツェンスベルガー本来の天性に逆らうものであったか否かを断ずることは容易ではないし、筆者はかならずしもこの点には同意しないが、抒情詩人としての彼の資質が、彼の社会批評的エッセイの

中にどのように生かされているか、その独特な関係は、十分考究に値する。筆者は、<sup>(2)</sup>すでに別の機会にもこの問題にふれたが、本論でも、後に論及するであろう。<sup>(3)</sup>

## 1

1973年2月に、エンツェンスベルガーは、東京で、『制度としての文学』と題する講演を行なった。この講演は、独創的な内容のもので、しかも彼の基本的な考え方を理解する上で極めて示唆に富んだ興味深いものである。従って、筆者は、まずこの講演の内容を筆者なりに整理してみたい。<sup>(4)</sup>

エンツェンスベルガーは、この講演の中で、まず、文学を一つの「制度」(Institution)として見るという新しい観点を提唱している。制度と言っても、それは、たとえばアカデミーとか、作家の団体とか、ペンクラブのようなものが、それぞれ一つの制度であるというような意味での制度ではない。また、たとえば文学書の出版社などを指しているのでもない。つまり、彼がここで何人かの社会学者を援用しながら定義しようとしているところによれば、制度とは、「個々の人間の期待や社会的期待を定義し、たとえば社会的交通規則のような、形式的性質のルールを設定するものであり、もしこれがなければ、社会生活は明確な定義を持たなくなって混沌としてしまうようなもの」である、と言う。そして、たとえば、もし制度がなければ、何が精神病で何が正常なのかわれわれには全く知ることができない、というフーコーの説を引用して、文学もこれと同じ意味で一つの制度と見做してよいのではないかと彼は提案する。

「なぜなら、これは極めて明瞭なことですが、一冊の本が存在するとか、誰かが物を書いているとかいうことだけでは、文学の存立にとってはまだ不十分なのです。本は何冊も書かれているけれども文学は存在しないという社会を、私たちははっきりと想像することができます。つまり、制度とは、すでに前以って常に存在している何物かなのであり、事前の諒解事項を形成するものであって、これがあるからこそ、私たちが一冊の本を手にした時、それが何であるか理解できるのです。

この意味で、文学は、ブルジョア時代のまさに中心的制度の一つだったし、今日でもある程度まではそうなのだと思います。」

こうした事情を例示するものとして、エンツェンスベルガーは、二つの具体的な例を挙げている。第一は、たとえばバルザックの小説である。これを読むと、われわれは、当時の読者が、そこにさまざまな型<sup>モデル</sup>を見出したであろうということがよくわかる。

若者が田舎から首都に出て来て、身を立てるとする。それはどのような経過をとるのか。こうした若者は、どのように行動しなければならないか。彼の前にはどんなチャンスが、どんな障害が控えているのか。「これこそ、文学によって媒介される社会の<sup>モデル</sup>型であり、また、こうした社会の<sup>モデル</sup>型は、この媒介を通じて文学が社会において非常に強い影響を与えていたことを確証しています。」——これが第一の例である。

第二の例としてエンツェンスベルガーが挙げるのは、どこの家にも、その古い戸棚の中にある手紙の束、つまり、祖父母たちがやりとりしたラブレターである。彼の指摘するところによれば、ここには文学作品や、偉大な作家たちの手紙の一つの<sup>エコー</sup>反響を見出すことができる、と言う。つまり、以前には、文学において、というよりただ文学においてのみ、若い人々にとって同一化のための型が用意されていたことを、これは示している、というのである。

さらに、文学は、ある種の形式的資格を次の世代に伝えるのに役立っていた、つまり、ドイツで「教養」と呼ばれて来たものが、文学によって次代に伝えられた、という問題がある。そして、これは、本来ならば極めて注目すべきことであるのに、ブルジョア社会においては、あまりにも自明なこととして慣れ切ってしまっていたために、更めて問題にされることがなかったのだ、というのがエンツェンスベルガーの見解である。

次いで、彼は、こうした事態には、上に述べたような無害な側面のみでなく、その裏側には、もっと悪しき側面があることを指摘する。つまり、過去においては、文学的教養がある一定の特権階級の付属物であったために、それが社会において一種の排他的機能を果たして来たのが実状であり、極端に言えば、文学は一種のテロルを行っていた、というわけである。このように、彼は、過去の歴史的状況を措定したあとで、次のような主張を掲げる。すなわち、「制度としての文学は、その権威と重みをはなはだしく失ってしまい、その威信は失墜して重要性は低下し、文学に関しては、上に挙げたような作用は、すべて以前より小さくなった」ということであり、もしこの主張が正しければ、「文学は、私たちの社会の中心的制度であることをやめてしまった」という推論ができるのではないか、というのである。

これをしも「文学の死」と呼ぶ議論は、ドイツにおいても盛んであるが、多くはこの趨勢を情緒的に、悲憤慷慨して論ずるものであり、もっと冷静に、事実を確定することが必要だ、として、彼は、近年のドイツにおけるヒステリックな議論にイロニーッシュな目を向けている。

これまで制度としての文学が担って来た社会的機能の多くが、すでに別の社会的制

度のもとに移行したことは事実であり、これを証拠立てる徴候は随所に見られる、として、エンツェンスベルガーは、出版界における危機感、文学批評の影響力の低下、国語教育における文学の役割の減少等に言及している。そして、文学という制度が持っていたさまざまな象徴的機能を今や受け持つにいたったものとして、テレビ、映画、それにポピュラー音楽と広告を挙げている。さらに、一般の人々の自己同一化の対象も、もはや文学作品のヒーローではなく、今や、たとえば政治的アンガージュマンにおいて出会う現実の人物であったり、ショー・ビジネスの世界の誰かであったりする、と述べている。

このような指摘は、彼自身も自明なことだと付言しているように、ドイツのみならず日本においても、しばしば風俗評論の類の対象としてとりあげられる現今の世相の指摘にすぎないとも言えるであろう。しかし、彼は、次いで、制度としての文学の発生史の問題に言及している。彼によれば、われわれがなじんでいるような形でのこの制度は、決して常に存在していたわけではなく、もともとそれが生まれてからまだ日が浅いものであって、實際上、それはブルジョア革命の産物なのである。従って、それが現在の形をとったのは、十八世紀中葉のことであり、それは「法則ではなく、例外であった」という。もしこの見方が正しいとすれば、現代における文学的制度の実体喪失には、当然、社会的理由があるはずであり、エンツェンスベルガーもその問題にふれているが、ここでは、ブルジョアジーの役割の変化、生産力の発展、現今の情報システムのコミュニケーションの役割の変化、さらに労働の社会化の増大といったことに理由を求められるであろう、という一応の仮説を暗示的に述べるだけにとどめている。

しかし、彼は、こうした事の経過が、作家にとってどんな結果をもたらしたかについては、かなりはっきりと新しい傾向を指摘し、さらに断定的な将来の見通しを述べている。すなわち、彼の信ずるところによれば、西ヨーロッパにあっては、作家は、今や大部分が産業制度と不可分な産業労働者になっており、従って、ブルジョア世界で知られていた特性を失いつつある。「天才崇拜は終わりを告げ、孤独な創造者が文学の舞台を支配することはなくなるでしょう。作家は、その特権の大多数を失います。」「一言にしていえば、作家の仕事はますます四方八方に拡散していくでしょうし、今日の作家は、典型的には、一つのことだけをするのではなく、あたかも、たくさんの職業を持っているかのように、種々さまざまなことを試みるのです。」こうしたことから、当然、作家の意識にも変化が生ずるはずであり、それには二面がある、とエンツェンスベルガーは指摘する。

まず、ネガティブな面からいえば、作家はこうした新しい事態を大きな困難と感じ、これを嘆きもするであろう。しかし、ポジティブな面を見れば、作家は今や机の前に坐ってばかりいるわけにはいかない以上、以前より多くを学ぶことができるし、従ってまた、以前ほど社会的に孤立してはいなくなる、というわけである。彼は、ここで幾つかの具体的な例を挙げているが、こうした立論を裏付ける根拠の一つに、多面的な活動に精力的に打ちこんで来たエンツェンスベルガー自身の体験があることは、いうまでもないであろう。

さて、エンツェンスベルガーは、こうした事態の将来について、一つの「ユートピア的見通し」を述べている。「作家たちが、ある点でますます作家でなくなって別のものになるとすれば、他方では、作家を職業とせぬ多くの人々がどんどん作家になり、ますます多くの人々が公に自己を表現するようになります。」つまり、これが一般的傾向であり、直ぐにはではないにしても、時がたてば、やがては現実となるはずの趨勢だ、というのが、エンツェンスベルガーの見通しである。

こうして、彼は、最後に、このような彼の仮定が正しいとした場合の文学の将来について、次のような展望を語っている。「文学生産の大部分についていえば、それは今よりももっと冷静で、醒めた形態をとるでしょう。それは、自分自身に対する評価でも、もっと控え目になって、この分野で働く人々もおそらく以前とは異なって、自分たちは芸術のために生きていると主張することが稀になるでしょう。そして、彼らは、文学的技術を文学以外の目的のためにも利用するようになるでしょう。ある点では、こうした新しい意味での文学は、今よりももっと生き生きしたものになるかも知れません。しかし、一方、文学は、その神々しい後光をかならずや失い、また、その排他性をも失うでしょう。そして、私たちが知っているような文学的<sup>フル</sup>制度は、その際、ほとんど残っていないでしょう。」

以上が、東京での講演『制度としての文学』でエンツェンスベルガーが述べている内容の概要である。

## 2

さて、エンツェンスベルガーが、現代における文学のこのような新しい趨勢について論じたことは、——この講演の場合、「制度」という一つの社会学的概念を適用したことによって、問題がいっそう明確に別出されていることは確かであり、この点に新しさがあるとはいえ——これが最初ではない。たとえば、彼が1968年に雑誌『時

スプー  
刻表』に発表したエッセイ『ありふれた言葉——最近の文学に関連して』の中で論じていることもまさにこの問題にほかならない。このエッセイは、<sup>(5)</sup>はなはだしく誤解されて、彼自身が上記の講演の中で苦笑をまじえて語っているところによれば、発表後数年を経た今日ですら、あたかも彼が文学一般に死刑を宣告したかのように非難される原因になったとのことであるが、このエッセイの中でも、彼は、「文学の死」ということ自体が 100 年も前から文学的流行の一つになっていることに皮肉な批判の目を向けながらも、こうした流行的現象の背後に、もっと重大な時代の趨勢として、文学というものの権威の失墜、その社会的機能の低下があることを指摘しているのである。たとえば、彼は、文学の社会的機能には、初めから二つの要素があった、として、次のように書いている。

「まず一方では、文学は、それが支配的文学であれば、常にまた支配階級の文学でもあり、支配階級の階級支配を強固にすることと、同時にそれを隠蔽することに役立つべきものであった。また他方では、文学は、革命から生まれたものであって、こうした起源に忠実である限り、上に述べたような文学の使命の枠を常に踏み越えて来たのである。だから、階級闘争における文学の機能は、初めから二面的に分裂したものであった。文学は瞞着に奉仕するものであったが、しかも、啓蒙にも奉仕したのである。しかしながら、おそくとも第一次世界大戦の終結以後、文学批評にとって的確な指針となりえたこのような文学の機能が目に見えて低下した。その頃以来、帝国主義は、意識の工業的処理のための実に強力な道具を開発したために、<sup>(6)</sup>もはや文学を頼りにしなくなったのだ。」

彼が、ここで文学の社会的機能の低下を、いわゆる意識産業の高度の発展との因果関係において考えていることは明らかである。『意識産業論』については後で詳述するが、上の引用に示されているように、この論文のテーマは上記の講演のテーマそのものといってよいのである。

さて、エンツェンスベルガーは、その最初の文学的出発においては詩人であった。彼の処女出版は、詩集『狼たちの擁護』(1957)であり、その後も最初の数年間は、引続き何冊かの詩集を出している。しかし、1962年に早くも『個々のもの』を出版したように、時評家、エッセイストとしての活動も早くからのものであるし、『政治と犯罪』(64)、『何よりだめなドイツ』(67)、を経て、特に1973年の『政治論集』に収録されている最近数年間の彼の文筆活動を、そのエッセイの主題に見ると、詩とは何の関係もないばかりか、広く文学一般ともほとんど関係のないような仕事が大部分

を占めている。この『政治論集』に集められた文章は、すべて、彼が自ら編集していた雑誌『時刻表』<sup>ツェイトン</sup>に発表されたものだが、そこには、たとえば、大学紛争の最中に書かれ、激動の時代的雰囲気とその筆致に感じさせるような現代革命論や、キューバ共産党の前史と構造と現状を詳細に報告して、その独特な反教条主義的体質に強い関心を寄せている論文『ある政党の姿』(70)がある。また、同年に発表された『メディア論への積木箱』は、題名の示すとおり、メディア論への試みであり、『革命のトゥーリズム』は、西ヨーロッパの進歩派の人々、特に知識人が社会主義国を旅行したり、またそこでの経験を自国に帰って報告したりする場合、どういう問題が過去にあったか、また一般にありうるかを、ソヴィエトの「招待外交」といった現象的事例を云々するのみではなく、アンリ・バルビュスやケストラー、またアンドレ・ジッドの場合などに遡って論じている。そして、彼がこれまででは最後に発表した論文『政治的エコロジー批判のために』(73)では、近年ジャーナリスティックには騒がれながら、革新の側にはまだ理論的にも政治的にも十分に対応する準備ができていない、このエコロジーという新しい問題に、偏見のない、自由で大胆なアプローチを試みている。この論文について、あるドイツの批評家が、「政治的エッセイの傑作の一つ」と評しているのも十分にうなずける内容を、これは持っている<sup>(7)</sup>。

イデオロギー的に見た場合、エンツェンスベルガーのエッセイが読者の関心呼び、常に注目を集めるのは、彼が現在の西ドイツにおける文学的反体制派、あるいは急進的左翼知識人の代表的存在の一人だからであり、殊に、ドグマティックに硬直した公式主義的な自称マルクス主義や、とりわけソヴィエト・コミニズムの正統派的権威主義に対して、常にはっきりと批判的立場に立った発言を続けているからであろう。つまり、既成の反体制派が「無害な観賞用スポーツ」<sup>(8)</sup>に墮しがちな現状に不満を感じている人々にとって、在来のドグマティックな偏見を脱して、新しい自由で創造的な立場から現実の問題に対決し、将来に向かって新しいパースペクティブを開こうとする大胆な試みを続けているエンツェンスベルガーの言動は、当然ながら大きな関心を引かざるをえないのである<sup>(9)</sup>。

このようなエンツェンスベルガーの自由で大胆な姿勢がよく示されているのは、たとえば、先に挙げたエコロジーに関する論文である。彼は、この論文の冒頭で、一見素人であるはずの自分が、エコロジーという極めて時局的で、しかも専門家の間ですらさまざまに交錯した議論が闘わされている問題になぜ口をさしはさむのかについて、その理由をまず説明している。すなわち、彼は、ここで、エコロジーが拠り所とし、基礎とすべき関係学問分野が、自然科学、社会科学、人文科学三部門にまたがる極め

て広いものであることを指摘し（彼は、その際二十余りの専門分野の名称を列挙している）たあとで、「この科学の出発点となるべきこのような状況のもとでは、この分野に関して専門家としての有資格者を見付けることなど、もはや問題にならないことは明らかである。今後は、この学際的分野においては、誰しもがエコロジストなのだ<sup>(10)</sup>」と書いている。これは、エンツェンスベルガー特有の旺盛な好奇心と、それに裏付けられた新鮮で鋭敏な問題意識とをよく示す言葉である。

この論文で、彼は、環境問題の新しい展開に目を向け、一方では、ブルジョアのエコロジストがその階級性のために真の問題を隠蔽しがちであることを酷しく批判すると共に、他方では、左翼の公式主義的イデオロギー的批判もこの問題に対する対応力のなさを示していることを、实例を挙げて鋭く指摘している。

この論文は、その論点のある部分で、彼が1965年に書いた『周辺部ヨーロッパ』と、それをめぐってペーター・ヴァイスとの間でかわされた論争を思い出させるものがある。すなわち、現在の国際関係の中では、いわゆる東西問題が南北問題と複雑にからみ合っていること、従って、現在では共産主義という言葉は単数形ではもはやほとんど意味をなさないことが、国際問題についての彼の基本的理解であり、立論の出発点になっている、という意味である。

ところで、これは、エンツェンスベルガーについてよく指摘されることだが、彼のエッセイを集めた最初の書物が『個々のもの』(Einzelheiten)と題されていることは、やはり極めて象徴的な意味があると言ってよい。上に挙げた最近の論文のテーマを見てもわかるように、彼は、今日まで、壮大なテーマで大論文を書いたことは一度もない。テーマは常に、あくまで「個々のもの」であり、彼の処女エッセイ集の後書きの中にモットーのように掲げられている「神様はデテールの中にひそんでいる」という言葉は、今日でもまだ依然として彼のモットーであるように思われる。つまり、壮大な一般論よりは、まず個々のデテールを追究することの方がはるかに意義がある、と彼が考えていることの、これは現われであろう。そして、こうした主題の設定の仕方そのものに、「それは資本主義のせいだ」という抽象的なきまり文句を連発する公式主義者に対する批判の意図を読みとることができるのである。

## 3

エンツェンスベルガーのエッセイのイデオロギー的側面については、以上に述べたとおりであるが、彼の時評的エッセイをいわば手法面から、文学作品として見た場合、

彼のエッセイストとしての、時評家としての優れた特質はどこにあるのだろうか。筆者自身の個人的関心からいえば、この問題は、前記の側面にもまして強く関心をひくところである。そして、私見によれば、これは二点に集約して考えることができる。

第一は、彼の、言葉に関する秀抜な感覚と才能である。卑近な意味でも、彼は外国語に非常に堪能であり、英仏語はもちろん、イタリー語スペイン語も自由にこなすとのことであり、これがたとえばキューバ共産党研究の際などに大いに役立ったものと思われるが、エッセイストとしての彼のこの特質については、さらに二つの方向が指摘できるであろう。

第一は、これは彼のエッセイを一読すれば直ちに感じられることだが、彼の文章の冴え、すなわち表現の才である。彼の表現の的確さ、読者の意表をつく豊かな機知、そして生き生きとしてまさに光彩陸離といった感のある文体の魅力は、特に諷刺の辛辣さにおいて本領を発揮する。この魅力は、彼の政治的立場に共感を持たない者でも、おそらく認めざるをえないであろう。そして第二は、言葉を分析し批判する際の、独特に鋭敏な感覚、ハンス＝アルベルト・ヴァルターの言葉で言えば、「言葉を解剖しつつ定義する」才能である。<sup>(11)</sup>この両面にわたる言葉の才が最もよく発揮された彼のエッセイの代表的作品は、やはり『シュピーゲルの言葉』である。<sup>(12)</sup>

標題からわかるように、彼は、ここでは雑誌『シュピーゲル』の言葉遣いに、言葉の選び方にこだわっている。彼がこの雑誌特有の隠語で模写してみせたゲーテの経歴などは、読者が思わず笑いを禁じえないようなウィットの一例であって、彼の閃くような才気を感じさせるが、特にこの場合には、ドイツ人の一般的常識からすれば不可侵の存在であるゲーテを対象に選んだことによって、その対照の妙がいつもの効果を挙げるのに役立っていることも見逃せない。この種のウィットや、諷刺における舌鋒の鋭さを、読者は、彼のエッセイの到る所で楽しむことができる。

しかし、言うまでもなく、彼は単なる才能ある諷刺的戯作家ではない。この論文の中でも、彼は、その言語感覚に導かれて、この雑誌の似而非批判的な本質を暴いてみせた。つまり、彼は、言葉の批判が社会批評の有力な武器になりうることを、このエッセイで見事に実証して見せたのである。

次に、エンツェンスベルガーの、エッセイスト、時評家としてのもう一つのすぐれた特質は、彼が、天下周知のありふれたような対象に、まったく新しい角度から照明を当てて見せるその手際のよさ、あるいは現実のある局面を写し出して見せるそのカメラアングルの斬新さにある。たとえば『政治と犯罪』に集められた幾つかのエッセイがそうであるし、また、意識産業論の各論として『個々のもの』の中に集められて

いる幾つかの小論文がそうである。彼は、世間によく知られた古い物語や、日常的な事件を、意外な角度からざくりと切り取って、その新鮮な断面を示して見せる。そして、われわれ読者を驚愕させるのである。

しかし、彼の場合、人を驚かす能力とは、実は彼自身がまず驚く能力と表裏一体を成すものではないだろうか。この点では、ラインハルト・パウムガルトが、これがエンツェンスベルガーの抒情詩人としての資質に由来するものであることを指摘しているが、これはまさに背癢に当たるものと言うべきである。たとえば、通信販売会社のカタログをあらためて「書評」の対象としてとりあげるためには、こうした出版物が「意識産業」の一部門であるという理論の裏付けと、カタログの文章にいわば生理的反射的に反撥する論者の並外れた傷つき易さと、果してどちらがより必須な前提条件であるだろうか。「日々に新たに猛然と食ってかかるためには、肌が薄くなければならず、記憶が悪くなければならぬ。さもなければ、すぐに諦めてしまうだろうか<sup>(14)</sup>ら」というパウムガルトの言葉は、エンツェンスベルガーの社会批評へのエネルギーの源を、いみじくも言い当てていると言えるだろう。

## 4

さて、エンツェンスベルガーの時評的エッセイについて、それが興味深いものであり、その文体が輝かしいまでに生彩あふれるものであることは承認するとしても、なおかつこれに対する酷しい反論も決して少なくない。すなわち、その意図が果してどこにあるのか、彼の目標はどこに置かれているのか。一体、彼は何を求めているのか、という批判である。たとえば、パウムガルトも、『個々のもの』について、ここには現状の支配関係を改善するための計画は何も書かれていない、と述べているし、ヨハネス・グロスは、次のように極めてイローニッシュな評語を『政治と犯罪』について書いている。

「何がなされるべきかについて、彼は何も語っていない。何がなされるべきであったかについても、やはり語っていない。あるのは、ただ、実際に起きたことはすべて起きるべきではなかったということと、起きてよかったことは何一つ起きなかった<sup>(15)</sup>ということ、そして、何もかもすべて変わらねばならぬ、ということだけである。」

これは、エンツェンスベルガーに対する否定的批判の典型といってよい。つまりエンツェンスベルガーは、現代ブルジョア社会の否定的側面をこの上なく犀利に批判す

るが、これに対するポジティブな反対提案を一切することがない——というのが、つきつめたところ、こうした批判の要点である。

筆者は、このような反対論には与しえないものだが、その理由の第一は、こうした批判に対して、エンツェンスベルガー自身が予め答えているからである。すなわち、「ここで試みられている批判は、その対象を撥ね付けることや抹殺することを意図するものではなく、対象を別の視点のもとに据えてみることを意図するものである。革命ではなく、改革がその目標である」と、彼は書いている。これは、『個々のもの』の後記の中に書かれた言葉であって、エッセイストとしてのエンツェンスベルガーの、いわば初心を表明したものと言ってよい。彼の批判が何らかの既存の政治的運動と結びついた形で行なわれるのではなく、常に、つきつめていけば彼個人の個人的立場からなされるものであるために、一步誤れば、唯我独尊に傾く危険があり、しかも彼が意識的に用いる「芸術的手段としての短絡」が殊更に過激な印象を与えがちであるにしても、この初心は、最近の仕事にいたるまで、やはり一貫しているように、筆者には思われる。

ところで、この処女エッセイ集『個々のもの』には、その後の彼のあらゆる時評的発言の基礎となり、基本的認識を形成する原点となった論文が含まれている。すなわち『意識産業論』である。彼は、先に示したシュピーゲル論や、フランクフルター・アルゲマイネ紙の記事を綿密に検討してその偏向性を浮き彫りにしてみせた『卵踊りとしてのジャーナリズム』、その他ポケット版文庫本論、トゥーリズム論等の各論を書いた後で、その総論として、この『意識産業論』を書いたのである。<sup>(17)</sup>従って、題名となっている彼自身の造語に意外性があり、この論文の獨創性が主として問題提起の面であって、理論体系の構築にあるのではないことは事実としても、これは決して思いつきに発して奇を衒ったような文章ではない。ここには、かなり精密な理論化の努力があり、序文で引用したリンダーの言葉を思い出させるものがある。

この論文のテーマ自体は、かならずしも新奇なものではない。概括的に言えば、あらゆるマス・メディア（但し、それは、通常の意味よりはるかに広い包括的な概念であって、すでに見たように通信販売会社のカタログをすら包含しうるような、いや、それにもまして、まずすべての教育制度を含めて、およそ現代社会において人間の意識形成に何らかの影響を与える可能性のあるすべての産業ないし「制度」を包含するような概念である）による意識操作を論じたものである。彼は、これを二十世紀に固有な基幹産業として捉え、60年代、70年代という世界史の発展段階を、これによって支配された時代として理解しようとしている。これは、エンツェンスベルガーのあ

らゆる立論の基礎をなす認識であって、そのことは、先に指摘したように、『ありふれた言葉』の中で、近年における文学の社会的機能の低下ないし権威の失墜を論じている際にも見られたところである。だが、このような基本的認識もまた、かならずしも彼の独創ではないかも知れない。しかし、エンツェンスベルガーは、こうした状況の中におかれた知識人の、批判者としての役割を確定しようとし、意識操作の手段である意識産業の巨大な装置に対する知識人の複雑でしかも矛盾に満ちた関係を解明しようと努めているのである。そして、その際——これは、極めて重要な点であるように筆者には思われるのだが——彼は、この作業を一つの自己認識として、自己批判として行なっている。つまり、「文化批評そのものが、批評している当の対象の一部ではないかのような、また、自分たちが意見を表明するに当たって、意識産業を利用しなくてもすむかのような、あるいはむしろ逆に、意識産業の方で自分たちを利用して<sup>(18)</sup>いることがないかのような」態度を、エンツェンスベルガーはとらないのである。これは、確かに仮借ない自己批判であり、弁証法的思考であって、あらゆる現状の無差別的否定などではないし、ましてや、自分自身だけは意識操作の網の目から逃れているといった類の妄想とはまったく無縁であろう。これが、筆者が反対論に与さない第一の理由である。

また、第二の理由は、エンツェンスベルガーの発言の中には、現代社会の改革のためのポジティブな提案がやはり含まれている、と信ずるからにはほかならない。そして、ここにこそエンツェンスベルガーの啓蒙的志向を見出すことができるのではないかと筆者は考えるのである。

『ありふれた言葉』の最後で、彼は、「文学が無害な存在であることに甘んじていられない作家たち……に対して、私はただ控え目な、いやそれどころかまったくとるにたりないような提案をすることしかできない」と書き、「政治的文盲状態が支配的であるような社会」の現状の中で、「ドイツに政治の ABC を教える」ために努力することの必要性を語っている。しかも、そのためには、まず ABC を教える側に ABC を教えねばならず、「自分が教えている当の相手から絶えず学ぶ者」だけがこの任務に耐えうる、とも書いて<sup>(19)</sup>いる。これはまさに啓蒙的志向に発した言葉ではないだろうか。

『意識産業論』の中でも、彼の同様な姿勢が示されている。彼の主張するところによれば、意識産業はどのような社会体制のもとにあっても、常に現存の支配体制を永遠化することを課題としており、従って「意識の搾取」を推し進め、大衆の「非物質的貧困化」をもたらす働きをしているのだが、一方では、そのことを可能にするため

には、個人々の意識や判断や決定の能力を常に新たに呼びさますという自家撞着を犯さざるをえないのだ、という。<sup>(20)</sup>だから、この産業にかかわりを持つ知識人は、「共犯者」としてこれに加担することになる以上、これを逆用して大衆の意識を喚起し、批判や決定の能力を高めることに努めることが可能なはずだし、またそうすべきだ、というのが彼の考えである。これは、ある意味では、ほとんど綱渡りのように困難な業であって、たとえばエンツェンスベルガー自身のような類稀な才人にして初めて可能なのだという皮肉な答を投げ返すこともあるいはできるかも知れない。しかし、意識産業によってほとんど全面的に支配されている今日の状況にあっては、ドイツで政治的啓蒙を推進するための、これは結局唯一可能な道であると、彼はやはり信じているのであろう。おそらくは、日本においても事情は変わらないのではなかろうか。

## 5

1961年、エンツェンスベルガーは、『ある詩の成立について』と題して講演をしている。これは彼の詩集『国のことば』(1960)に収められている詩『すべての電話加入者へ』の成立過程を公開したものである。すなわち、彼は、最初の走り書きのメモの段階から始めて、連想が拡がり、用語が置き換えられ、構成が密度を増して、詩が形をととのえられていくそのプロセスのほとんどすべてを示して、いわば手のうちをさらけ出してみせたのである。詩人にとって、しかも、詩的靈感を誇大視しがちな伝統を持ち、Dichter という語に独特な天才性とデモニーの世界の雰囲気や付着させて来たかに思われるドイツにおいては、これは驚くべく大胆な試みではなかろうか。この大胆な行為は、いわば詩を客観化し、相対化したものと呼んでよいであろう。

だが、これ以後も、彼の視野がさらに拡大し、彼の関心の領域や活動の分野が拡がるにつれて、彼は、単に詩のみならず文学一般を客観化し、相対化するようになる。つまり、彼が文学について語っている場合にすら、彼の視野は文学の限界を越えて、さらに遠くに及んでいる。

こうした彼の特徴的な姿勢、基本的態度を最もよく示しているのが、本論の最初に要約した東京での講演『制度としての文学』である。すでに見たように、彼は、ここでは文学を一つの制度として捉え、それがブルジョア社会において果たして来た役割を歴史的にたどって、文学の現状と将来とを展望する見方を提唱している。文学は決して絶対的存在ではなく、それも歴史的にのみならず、意識産業との関係という面からすれば社会的にも相対的な存在として捉えられている。彼は、このような客観化に

よって、文学に、あるいは文学的活動に、新たなパースペクティヴを開いているのである。啓蒙的エッセイストとしてのエンツェンスベルガーの最大の特徴は、この点にあると言ってよいのではないだろうか。

最後に、筆者が抱えている一つの疑問を付け加えておきたい。東京での講演の最後で、エンツェンスベルガーは、「秘教的文学」について語っている。彼の見るところでは、文学という制度は、将来おそらく社会の中で一種の拡散をとげていくであろう、という。比喩的に言えば、それはちょうどコップの水に砂糖を投げ入れると、その砂糖が水に融けて拡がっていくような具合である。しかし、その場合、コップの底には、若干の砂糖が融けきらずに沈殿する。この沈殿した部分に当たるような文学、それが「秘教的文学」だということである。それは通人のための、少数の仲間のための文学であり、表にはあまり姿を現わさず、公共性も薄れた存在である。(そのような意味で、彼はこれを、例によってイローニッシュな辛辣さで「カタコンベ文学」とも名付けている。)従って、そのような文学は、途方もなく技巧的になりがちで、きっと強度にエリート的な特性を持った文学であるだろう。そして、一般に制度というものは、それを支える社会的基盤がとうに死んでしまった後にもしぶとく生き残る、という歴史の通則に従って、こうした文学も当分は生き残るであろう、というのが、彼の当面の見通しである。

そこで、筆者の疑問は、エンツェンスベルガーの文学作品の持つ魅力は、あるいは彼がこの秘教的文学の世界にも半ば住んでいるから、彼がこの秘教的文学の世界に片足を踏まえているからこそ生まれているものなのではないか、という問題、そして、もしこの推定が当たっているとすれば、このことは、彼の啓蒙的志向にとって果して長所であるのか、あるいは逆に短所となることはないのか、という問題である。筆者には、この答はまだ得られていない。

## 注

1. Heinrich Böll/Christian Linder: Drei Tage im März. 1975 Köln, S. 13.
2. 拙論「言葉と批評——H. M. エンツェンスベルガーの《シュピーゲル》論」(『言語文化』No. 10)を参照されたい。
3. 本論文は、1975年3月、日本独文学会主催の「ドイツ文化研究ゼミナール」における研究報告を骨子としている。従って、元来はこのゼミナールの統一テーマ Aufklärerische Tendenzen in der neueren deutschen Literatur に即して主題を設定したものであった。しかし、エンツェンスベルガーの啓蒙家としての側面を考察することは、彼のエッセイ世界

に対する適切なアプローチの一つであると考えられるので、筆者は、この報告を敷衍して、以下の小論にまとめたものである。

4. H. M. Enzensberger: *Literatur als Institution*. この講演の原文はまだ活字になったことはなく、テープに録音されたものが残っているだけである。但し邦訳はある。(杉橋陽一・若松準訳『文芸展望』創刊号 [1973年4月, 筑摩書房刊] 所載) この邦訳は、テープをおこして翻訳したもののようだが、こうしたハンディにもかかわらず優れた訳業である。このような事情のため、この講演に関する限り、以下の引用には出所を記さない。
5. H. M. Enzensberger: *Gemeinplätze, die Neueste Literatur betreffend*. 《Kursbuch》15, 1968. (拙訳「文学は蘇生し得るか」『海』創刊号 [1969年7月, 中央公論社刊])
6. *ibid* S. 193. 前掲誌 104 ページ。
7. Jochen Steffen: *Gleiche Brüder auf verschiedenen Wegen* 《Die Zeit》31 Januar 1975 S. 15.
8. H. M. Enzensberger: *Warum ich Amerika verlasse*. 《Die Zeit》1. März 1968. S. 16.
9. もっとも、この点については、エンツェンスベルガーを「右翼的左翼人」ときめつけて酷評するような立場もありうる(たとえば Hans Mathias Kepplinger: *Rechte Leute von links. Gewaltkult und Innerlichkeit*. Olten, 1970)。事実、エンツェンスベルガーの発言や行動が現実の政治の流れの中で客観的結果的にどのような役割を果たすことになるかについては、ある留保をもって見守る必要があるかも知れない。
10. H. M. Enzensberger: *Zur Kritik der politischen Ökologie* 《Palaver. Politische Überlegungen (1967–1973)》edition suhrkamp 696, S. 170.
11. Hans-Albert Walter: *Was zutage liegt, und was nicht*. 《Über Hans Magnus Enzensberger》edition suhrkamp 403, S. 170.
12. このエッセイについては、注 2) に挙げた拙論を参照されたい。
13. Reinhard Baumgart. *Enzensberger kämpft mit Einzelheiten*. 《Über Hans Magnus Enzensberger》S. 131 f. なお、この点について、詳細は、上記拙論を参照されたい。
14. *ibid*. S. 132.
15. Johannes Gross. 《Politik und Verbrechen》. 《Über Hans Magnus Enzensberger》S. 165
16. H. M. Enzensberger: *Einzelheiten*. edition suhrkamp 63, S. 207
17. 『意識産業論』については、拙論「H. M. エンツェンスベルガーの《意識産業論》」(『一橋論叢』第 61 巻第 2 号, 1969 年 2 月号) を参照されたい。
18. H. M. Enzensberger: *Bewußtseins-Industrie* *ibid*. S. 16.
19. H. M. Enzensberger: *Gemeinplätze* *ibid*. S. 196 f.
20. H. M. Enzensberger: *Bewußtseins-Industrie*. *ibid*. S. 15.